

大学祭の起源は創立記念日にあり Origin of Toyo university Festival

毎年、各キャンパスで開催されている大学祭。

大学祭のはじまりは、実は、創立記念日と関係が深い。「哲学館事件」に端を発する哲学館記念会（東洋大学記念会）が明治36（1903）年12月13日に開催されたが、「暮れに近く、寒い時期に開催しては客人を招くに申し訳ないので、前月に繰り上げよう」という円了博士のはからいで、明治44年から11月23日に変更された。その後、大正5年からこの日を「東洋大学創立記念日」と呼んで祝賀式を挙行するようになり、以降11月23日が創立記念日となった。

そして、創立記念の式典とともに、学生たちが余興や模擬店などの催しを行ったことが、本学の大学祭の起源と見ることができる。

創立記念日は、その時々の時勢により、延期されたり中止されたりと紆余曲折を重ねたが、基本的には平成時代にいたるまで、11月23日前後の数日間が“大学祭のシーズン”となった。



第47回東洋大学祭。講堂新築工事が遅れたため、11月に行うはずの創立記念式が正月を過ぎてしまい、あわせて大学祭も1月に！（昭和9年1月28日）



昭和38年からは「白山祭」に名称を変更。第1回白山祭から数年間継続して設定された統一スローガンは「人間を返せ」。この頃から、創立記念の祝賀的な意味合いは薄まり、自治意識の高揚とマスプロ教育に対する糾弾などの様相が濃くなっていった（写真は昭和40年11月23日）。



創立50周年記念として行われた大学祭。新制大学移行後も、大学祭は創立記念の祝賀行事とセットになっており、これに社会状況が反映されながら、内容に変化がもたらされていった（昭和12年11月23日）。



工学部が新設された翌年の昭和37年からは、川越キャンパスで「工学祭」がスタート。当時のタイトルは「産学協同～アイデアとパイオニア精神」など、理系学部らしいネーミングがつけられていた。写真は、夜な夜な歩いた前夜祭のちょうちん行列（昭和37年11月）。



平成初期の白山祭の様子。模擬店の数が増えたため、用意されたプロパガスタが圧巻だ（平成元年11月23日）。



キャンパスや学部の開設に伴い、平成9年に「雷祭」（板倉キャンパス）、平成17年に「朝華祭」（朝霞キャンパス）と、新たな大学祭が誕生。最も歴史が古かった「工学祭」の名称も、平成22年に「こもれび祭」へとリニューアルした。近年は自己や将来の進路を意識したテーマや、地域の方々にも楽しんでもらえるようなコンセプトが主となった。

編集 雑記

第235号、テーマは

「哲学を、持て。」

本質に刺さるような、鋭い言葉だ。自らの哲学をしっかり持っている人物はものすごく、カッコいい。それが分かっているから、強く心に響く。

☞ 箱根駅伝走者の付き添いは、走者が指名する？ または監督が指名する？ どちらだと思いますか。出走前の気持ちをいかに平常時に保ち、スタートラインにたてるかは、付き添い次第。まさにチームがひとつに結束してたち向かうのが箱根駅伝です。第89回大会はこのような視点をもって観戦すれば楽しみが増えるのでは？（鉄）

☞ 学生生活の全てを投げ打って練習してきた選手でも怪我や体調不良のため、本番に出ることができないという場面は数多くある。彼らの頑張りを知っているからこそ、出場させてあげたいという気持ちも強いが、勝負に徹し、優勝の2文字を勝ち得るためには最善の策を取らなければならない。全ての想いを釋に込めて。（徹）

☞ 「懐かしい」と感じる時。今、この時も「懐かしい」と思う日が必ずやってくることだろう。その場所を守り、進化させていくことが使命と感じた11月23日。たくさんの卒業生が歩んだこの道に、これからは皆さんが学んだるしを刻み、大学の未来の続きを創っていく番だ。卒業しても、あの頃を思い出せる、愛される大学であり続けたい。（轍）

☞ 今年も多くの友人に、支えられ助けられた一年だった。素晴らしい人たちに囲まれていると「自分は彼らに何を返せるだろう」と常々思う。気持ちに寄り添うことも大切、時に真正面から向き合うことも大切。誰かのために、自分にしかできないことは何だろうか。絆の中で生きている限り、人は優しく少し苦しく思い悩む。（哲）

☞ 創立記念式典で竹村学長による「未来宣言」を聞きながら、歴史資料の中で出会ってきた、この大学を創った先人たちに語りかけていた。「125周年を迎えました」と。そのとき、誓いの中に「責務」という言葉が聞こえた。とたんに、熱いものがこみ上げてきて、震えた。君も歴史を創っているひとりなんだよという、先人からの声が重なったからだ。（綴）